弥生の高地性集落【3】

12.

畿内と播磨の境　明石川・伊川流域の明石平野は弥生時代から開けた地

弥生の高地性集落「表山遺跡」とその下に広がる弥生の集落群を訪ねて

明石川流域は明石平野の西縁の丘陵地を南北に流れ下り、明石海峡に注ぐ流域で本流の明石川と支流の伊川谷川、櫨谷川である。

この流域は弥生時代からよく開けた地域として知られ、例えば、弥生時代の最も早い時期に拓けた吉田遺跡、6 世紀の大壁造りの建物（窯業など高度の技術を持つ渡来人の住居）が発掘された寒風遺跡、弥生時代中期初頭から古墳時代後期までの玉造り工房跡のある新方遺跡、「日本書紀」に見られる億計（おけ・後の仁賢天皇）、弘計（をけ・後の顕宗天皇）王子の物語が残る押部谷を中心とした地域などがある。

弥生時代　鉄器が入り　稲作水田の展開と共に地域集団が発生して　それがだんだん国の性格を持ち、最後に大和王権に集約されてゆく。畿内の西端にあって　弥生の初めより発展していった明石平野の変遷を見れば、そんな　日本の国づくりの歴史が鮮やかに浮かび上がってくる。

■　明石平野の変遷

1.　弥生時代　稲作のはじまり

鳥獣を追い､木の実を採取して暮らした縄文時代､明石平野一体はまだ水草が生い茂る湿原に過ぎなかった。ちょうど　今から 2200 年ほど前　大陸・朝鮮半島から稲作の技術や鉄・青銅器をたずさえて、日本列島にやってきた人たちがいた。弥生時代の始まりで、北九州の一角から東へ進み、この新文化はまもなく明石平野や大阪に及ぶ。(「今から 2800 年前　縄文晩期後半と位置付けられている時代から弥生時代早期が始まる」とするとする説が最近　話題となり、検証が進められている。)

北九州から瀬戸内海を東進してきた弥生文化（青銅器、鉄器、水稲耕作など）の担い手たちは、近畿の入り口である明石海峡に到達し、まず明石平野の西縁にあたる丘陵地に沿って流れる明石川に沿って住み着き、近畿地方で最も古い弥生時代の集落を形成し、明石川流域の湿地帯はやがて豊かな水田になった。

吉田遺跡は弥生時代前期前半を代表する遺跡で、その人たちの営んだ村落跡である。

出土土器は、カメと壷であり、木ノ葉文様の壷が有名である。

木ノ菓文様の土器は、唐古（奈良県）からも出土し、銅鐸の文様にもなっている。土器の他に鉄板も発見されている。

櫨谷川流域は櫨（はぜ）というウルシ科の落葉広葉樹（実から蝋を採り、樹皮は染料となる）が多く栽培された谷間なので櫨谷とも、4 世紀初めから土師部（はじべ）がいて、陶器を造ったので櫨谷と云うようになったともいう。

須磨区白川付近から西流し，明石川に合流する伊川流域は伊川谷と呼ばれ、川筋に沿って　谷底平野が発達している。昔、伊川は蛇行し、少しの雨でも流れを変え「い」の字を描く「あばれ川」であった。そのため民家は川を避けて山裾に建てられた。

2. 邪馬台国の時代　高地性集落が明石平野の縁の丘陵地の上に現れ、平地の集落と連携して戦に備える

3 世紀のはじめ、弥生時代の後期　日本は 30 あまりの国に分かれ、もっとも大きな国が邪馬台国であった。邪馬台国が大和・河内にあったとする説に立てば、明石平野も邪馬台国の領域に含まれることになる。

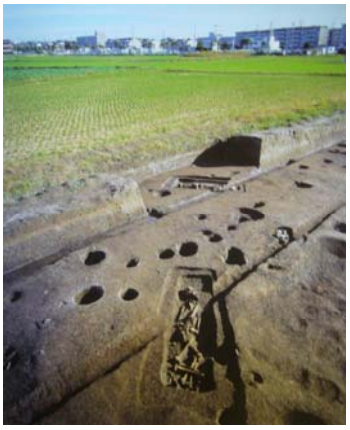
池上口ノ池遺跡をはじめ、明石平野を囲む丘陵の上に営まれた弥生後期・古墳初期の集落は邪馬台国時代にたびたび起こった戦争と関係のある集落ではないかと思われている。

　　伊川と明石川の合流点近くに存在するこの時代の拠点集落　新方遺跡からは 3 体の石鏃で指された人骨が出土しており、この新方遺跡から伊川谷に少し遡った池上の中段地には新方遺跡からの移住と考えられている　池上口ノ池遺跡や低地の池上北遺跡　そして　北の丘陵地に頭高山遺跡などの集落があり、これらの集落を見下ろせる丘陵尾根の端に高地性集落　表山遺跡がある。

また、すぐ西の丘陵の上にも　高地性集落青谷遺跡があり、これらの高地性集落が下の平地の村と連携して「戦」に備えていたと考えられる。

3.　巨大古墳の時代へ

戦乱に明け暮れた邪馬台国の時代は統一王権を生み出す陣痛の時代であった。
畿内を中心に関東から九州北半分にいたる各地を配下に治めた大和の大王権はやがて海外へも進出するほどの強大な政権となる。
　大王はその富と権力を背景に巨大な墳墓を造営、各地の王（首長）もまた　これに習った。
古墳時代の始まりである。
明石平野にもこの地を支配する王が出現し、数々の古墳を残してゆく。
伊川谷のひさご瓢塚古墳　神出の金棒池古墳　玉津王塚台の王塚古墳はいずれもこの地を支配した王を葬った前方後円墳である。



戦いの後が見られる　明石平野　弥生の中心集落　新方遺跡　　王塚古墳

■　弥生の高地性集落　伊川谷　表山遺跡

弥生の高地性集落　表山遺跡から明石海峡を望む　橋は表山橋

弥生の高地性集落　表山遺跡より　伊川谷を眺める　写真中央を左右に伊川が流れる

伊川谷　弥生の高地性集落　表山遺跡　山の頂上部に環濠や青銅鏡などが出土

伊川谷池上　伊川　高松橋周辺より池上集落と旧物延べ神社の名がある惣社・池上の丘陵地

表山遺跡より　連携したと考えられる伊川谷の平地集落　池上口の池周辺

■　天王山古墳群

古墳時代前期（５世紀初めごろ）と後期（７世紀初めごろ）に、伊川を見下ろす丘の上に作られた　古墳群です。
方墳２つは古墳時代の初め、他の円墳４つと帆立貝式古墳１つは古　墳時代後期のものと考えられています。
鏡や剣など多くの副葬品（ふくそうひん）から、この一帯に大きな勢力　を持っていた豪族（ごうぞく）の墓だと考えられています。
360 度の視界が開ける明石海峡・淡路島・播磨灘の展望。残念ながら　大阪湾方面は垂水丘陵・須磨の連山にはばまれ見えない。
この地が攝津・播磨の国境であることよくわかる

■　瓢塚古墳

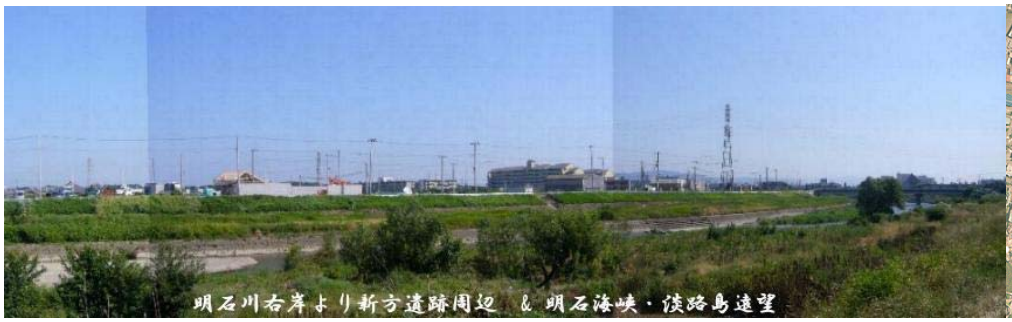
伊川支流右岸の標高６０ｍ薬師山山頂に位置する前期の前方後円墳から、一部盗掘されていましたが良好に遺存した粘土槨が検出されました。出土遺物は木棺内から鏡１、石釧９、車輪石４、ガラス小玉３００点以上、石製勾玉５、石製管玉４０がほぼ原位置で見つかり、配置状況を知る貴重な資料です。また、副葬品の内容から被葬者は女性である可能性があります。

■　玉津周辺の遺跡

■　伊川と明石川の合流点　明石平野　弥生の中心集落　新方遺跡

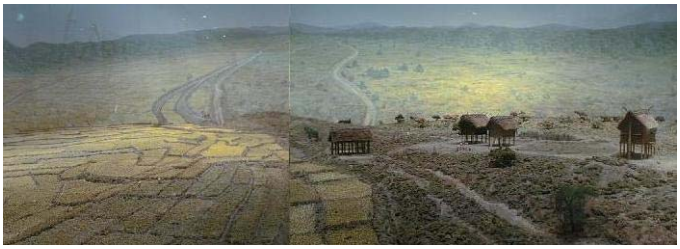
鏃の刺さった人骨３体がみつかった

新幹線ガード下すぐ南、明石川と伊川合流点の水田地帯、標高８～１０ｍの沖積地が新方遺跡である。
昭和４５年（１９７０）に発見されて以来、十数次に及ぶ発掘が行われた所で旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺跡が発見されている。
特に、弥生時代前期の人骨に多くの石鏃が突き刺さっていたことや、玉作り生産跡があったことで、注目を浴びている遺跡である。旧石器時代の出土品では、翼状剥片の石核がある。
弥生時代のものでは、大規模な方形周溝墓、近畿地方最古の弥生前期の人骨（一体には１７本の石鏃）、竪穴住居跡、玉作りの遺物が出土している。古墳時代では、多くの竪穴住居跡、水田跡、玉作り工房跡（原石・勾玉・菅玉・臼玉）が発掘されている。



明石川の右岸住宅地に変わった現在の新方遺跡
瓦屋根の清水寺の手前で鏃の刺さった人骨３体がみつかった　2006.8.24.

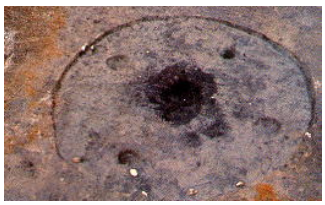
■　弥生前期の集落　玉津田中遺跡



玉津田中遺跡　弥生の集落　　イメージ図　　県立歴史民俗博物館展示より

玉津田中遺跡は、弥生時代前期前半に集落が営まれ、弥生時代全期間および古墳時代中期まで継続する。竪穴住居や掘立柱の建物を中心とした集落と、集落の北に隣接して、３０数基の方形周溝墓群と埋葬主体の木棺墓などが検出された。 また、耕地は主として集落の西側にあり、水路や畦で区画した水田が見つかった所である。

水田に残された足跡と土器に残された木葉・籾の跡



前期の竪穴式住居跡(A)

中期の壷棺(B)

水田跡　畦の断面??(C)

中期の方形周溝墓跡(D)

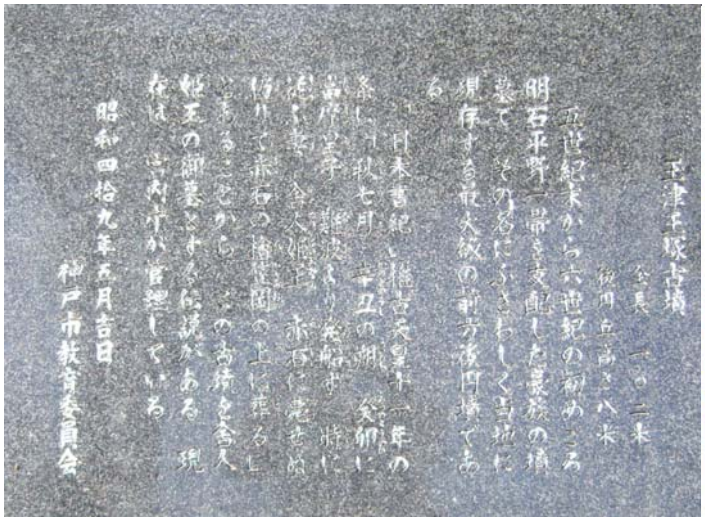
弥生時代の村と方形周溝墓（推定）

■　吉田南遺跡　弥生から奈良・平安・鎌倉時代に至る複合集落

海岸より 2km 上流　明石川の右岸　古代　播磨国明石郡　郡衙跡が出土

この遺跡からは、掘立柱の倉庫群、館とみられる廂（ひさし）つきの建物、厨家（くりや＝台所）とみられる、井戸をともなった掘立柱建物群が確認されている。播磨国明石郡はこれまで郡衛（郡の役所）の所在地が明らかでなかったが、水陸交通の要衝の位置を占めるこの遺跡が、郡衛跡であるとの説が有力になってきた。

■　玉津王塚古墳　　全約 100m の中期前方後円墳



「日本書紀」によると、推古天皇１１年(603)、征新羅将軍当麻皇子の妃・舎人姫王が薨去され、赤石の檜笠岡の上に葬られたと記録されている。しかし、実際はそれよりも古く、5 世紀末から 6 世紀初めごろにこの地を支配した豪族の墓であったと推測されている。もとは陪塚と考えられる３基の古墳があったが、今は、宅地化が進んで、それらは消滅している。

■　明石海峡を眺める高台にある兵庫県最大の前方後円墳　五色山古墳

まん前に明石海峡を望む垂水丘陵の端　畿内大阪湾側の要である

阪神間の背後に連なる六甲連山が須磨の海岸で明石海峡に落ちる。摂津・播磨の国境である。
このすぐ西側の海岸の高台に兵庫県最大の五色山古墳がある。

畿内へ入り入り口　大和王権の備えの要の位置にあり、大和王権に属する大豪族族長の墓であろう。
ところが、この明石海峡周辺にはそれを支える集落はなく、この大前方後円墳の主は何者か・・・

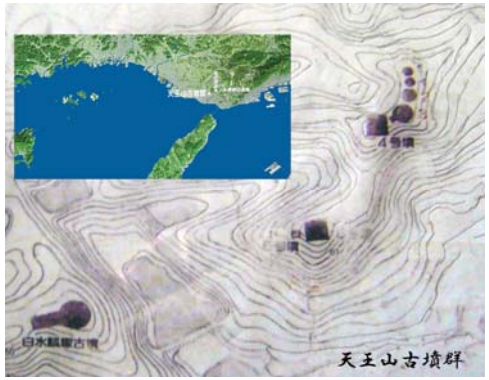
すぐ西の明石平野には弥生時代から開けたところで、数々の集落があり、この明石平野を支配する勢力がある。
古墳時代に早くから　大和の勢力化にあったと思われるが、その勢力は明石平野を取りかこむ丘陵地に古墳をきずいている。
どうも　この明石海峡周辺は明石平野の勢力からは離れ、大阪湾勢力の手にあったと考えられている。
　単純に明石の勢力などと考えていましたが・・・・・・・・・・・・・・・・・
詳細は謎であるが、その 1 案として　出土品などから　和歌山・和泉の紀氏との関係を考えねばならぬと五色山古墳の管理事務所で教えてもらった。
　北九州から大和へ　日本の国づくりが急速にすすんでゆく、古墳時代前夜　西日本では　中国・朝鮮半島を含めて　数々の文物　そして　人の交流が在り、それが　北九州と大和に集約され、また　全国へ伝播してゆく

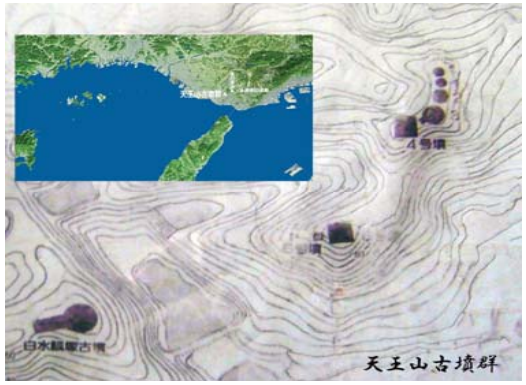
鉄の伝来ルートも弥生の人の動きを見れば　鮮明になるのでは・・・と思って　弥生の高地性集落を調べ始めていますが、現在の考古学では　まだ　この瀬戸内での集団の動きを捉えきれていないと思う。
大陸　朝鮮半島からどんなルートで製鉄の技術我伝わったろう。また　大陸・朝鮮半島との交流が盛んであったこの弥生の中で製鉄技術以前の鍛冶技術がどのように変線していったのかも見たい。
最近の人類学と考古学の合体　微量分析機器の発達とその利用による科学的解析の展開などが　そんなところにスポットを当て始めており、いずれはこれらの謎が解けるだろうとおもう。
それまでは　古代は　まだ　ロマンの世界である。

写真アルバム　明石川流域　伊川谷・玉津に弥生の高地性集落と弥生の戦を訪ねて

伊川谷・永井谷への入り口の丘陵「天王山」古墳時代　明石平野を支配した首長の墓天皇山古墳群

西は播磨灘　南に明石平野・淡路島　東に舞子の丘陵地　北には奥へ広がる伊川谷の谷底平野　縄文時代から人の住み着いた明石平野
ここは畿内摂津と播磨の国境の地　大陸と大和を結ぶ海道の結節点　縄文・弥生から古墳時代へと日本黎明期の変遷を見続けた地である




4号墳
白水越塚古墳
天王山古墳群

天王山から明石海峡・大阪湾を望む　2006.9.19.

須磨で海に落ちる六甲西麓の丘陵地に阻まれて大阪湾の海岸線は見えない

天王山から表山遺跡を遠望　2006.9.19.

バックに横尾山から鉄拐山・鉢伏山と続く六甲連山の西端が見えている

摂津・播磨の国境　明石平野側からは舞子丘陵に阻まれ大阪湾側がみえない

ここが播磨側の国境であることがよくわかる

天王山からの播磨灘　遠　望

明石平野に突き出た丘陵地の山頂には弥生の高地性集落・この地を納める首長の墓が築かれた　この頂からは　どこまでが見張らせるのか　???
晴天の 9 月 19 日午前中　天王山の頂からは　遠く播磨灘に浮かぶ小豆島・男鹿山　そして　播磨の高御位山が視認で来た

弥生の時代から集落が営まれた伊川谷

天王山からの播磨灘　遠　望

頭高山から南 伊川谷から明石平野望む　左手丘陵地　中央が弥生の高地性集落跡　表山遺跡

伊川谷　伊川から北の頭高山・学園都市を望む　2006.9.19.

頭高山から南 伊川谷から明石平野望む　左手丘陵地　中央が弥生の高地性集落跡　表山遺跡

伊川谷の奥から伊川の谷底平野に広がる集落を見下ろす

弥生の高地性集落　頭高山遺跡

2006.9.19.　神戸市西区学園都市

伊川谷の丘陵地より　平地の集落を見下ろす弥生の高地性集落　表山製鉄遺跡

伊川谷の丘陵地より　平地の集落を見下ろす弥生の高地性集落　表山製鉄遺跡

発掘当時の表山遺跡

出土した環濠

表山遺跡の航空写真

伊川谷の平地の集落をみおろす弥生の高地性集落　表山遺跡

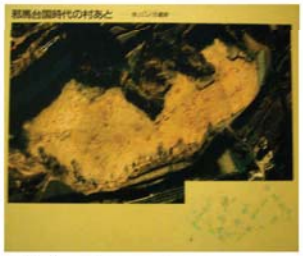
■ 弥生の高地性集落　伊川谷　表山遺跡

弥生の高地性集落　表山遺跡から明石海峡を望む　橋は表山橋

弥生の高地性集落　表山遺跡より　伊川谷を眺める　写真中央を左右に伊川が流れる

伊川谷　弥生の高地性集落　表山遺跡　山の頂上部に環濠や青銅鏡などが出土

伊川谷池上　伊川　高松橋周辺より池上集落と旧物延べ神社の名がある惣社・池上の丘陵地



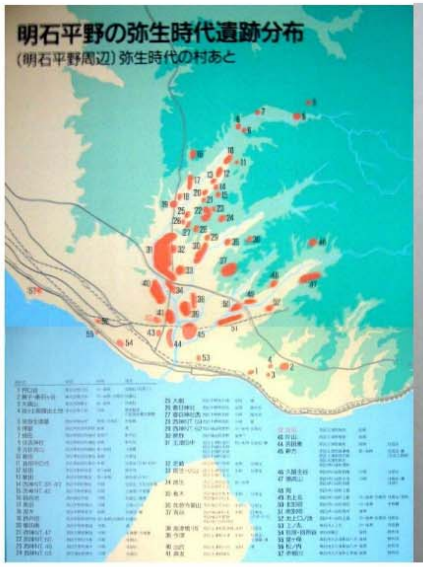
表山遺跡より　連携したと考えられる伊川谷の平地集落　池上口の池周辺

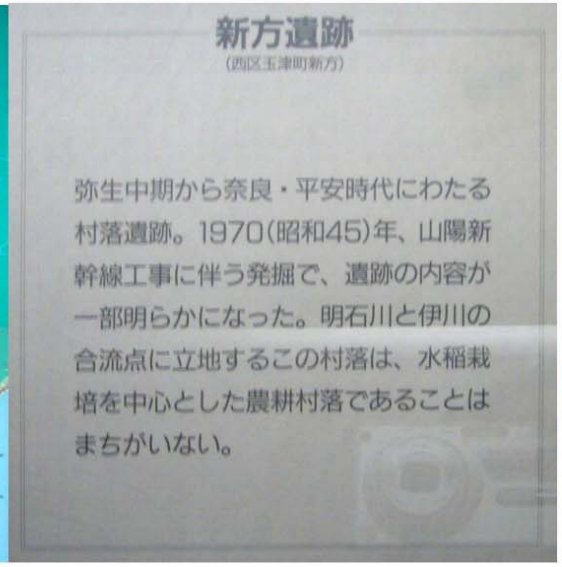
弥生の高地性集落　表山遺跡周辺より　明石大橋・淡路島遠望

弥生の高地性集落 表山遺跡周辺より　伊川谷　池上ロノ池集落を遠望

玉津　明石川と伊川の合流点周辺

この川の周辺から北の丘陵地の山裾に弥生の平地の集落が広がっていた





弥生中期から平安時代の複合集落

新 方 遺 跡

石鏃のささった
弥生時代の人骨3体が出土

場所は明石川と伊川の合流点
早くから稲作集落が開けた地
ここでも「弥生の戦さ」があった

弥生中期1世紀頃の出土品

奈良時代の出土品

明石平野　弥生初期の中心集落　新方遺跡　そこで 17 ケ所も刺された人骨が出土